

ドナウ の 四季

2012年・夏季号・No.15

腫瘍温熱治療のパラダイム転換	盛田 常夫	1
『腫瘍温熱療法－オンコサーミア』出版記念会に参加して		
	笠原 祐子	2
癌患者の友に学ぶ	瀬川 知恵子	4
近 況	金子 三勇士	5
マグロと目が合った	町野 憲善	6
楽しみ	森田 友子	8
ヴェスプレーム「日本の日」を終えて	森田 友子	9
夢だったバレエ留学	前野 詩織	10
緑の丘日本語補習校	下村 亜紀子	12
留学生自己紹介	伏田 昌洋・岡本 佳子	13
留学生自己紹介	阿久澤 政行	14
スポーツ行事・運動サークル情報		15

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia

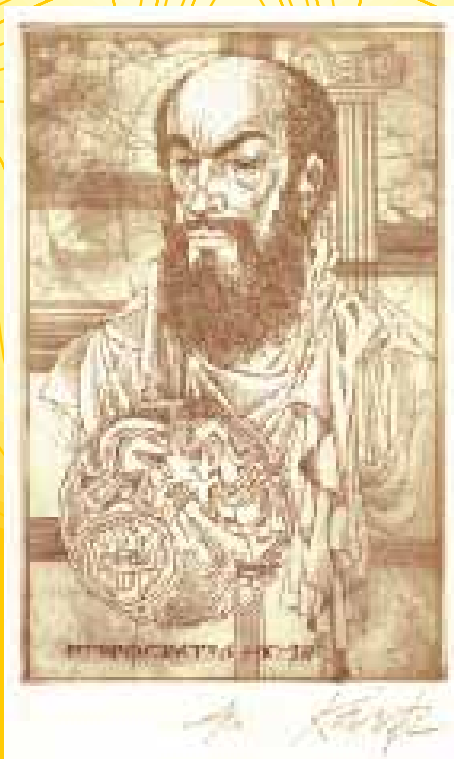
New Paradigm in Hyperthermia

Andras Szasz and Tsuneo Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア

ハイパーサーミアのパラダイム転換——医術から医学へ

サース・アンドラーシュ／盛田常夫[著]



日本評論社

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、あるべき手法を示した著書。曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。
オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。ドイツでは百か所以上のクリニックで、韓国の主要な大学病院に設置。
6月10日発売。定価3200円+税。大手書店、Amazonにて購入可。

腫瘍温熱治療のパラダイム転換 —— 出版記念会挨拶

盛田 常夫

本日の記念会を開催していただいたセルダヘイ大使、ご参集いただきました皆様、著者のサース・アンドラーシュともども感謝いたします。

実はちょうど10年前の2月に、この同じ場所で同じセルダヘイ大使によって、やはり出版記念会が開催されました。ハンガリー出身の天才たちの伝記を扱った『異星人伝説』（マルクス・ジョルジュ著、日本評論社、2001年）の刊行を祝ったものです。10年の時間を経て、再び、こうして出版記念会を開くことができました。今日ここに参集されている何人かの方々は、この前の会にも出席されています。10年の歳月を経て、再びこのような会をもつことができ、たいへんうれしく思います。

セルダヘイ大使と二度もこのような会をもつことができたことは、たいへん不思議な巡り会いです。二度あることは三度あると言います。2002年の記念会からさらに12年の時間を遡った1990年1月に、セルダヘイ大使と一緒に仕事をすることがあります。当時、日本の首相として海部総理が初めてハンガリーを訪問することになりました。体制転換の真ただ中、私は日本大使館に専門調査員として赴任していて、経済大学（当時はカール・マルクス経済大学）での学生との対話集会を組織することになりました。対話集会とは名ばかりで、事前に質問と回答を日本語とハンガリー語で準備しました。当時、エトヴォシュ・ローランド大学の講師だったセルダヘイ大使を含め、3名の通訳態勢をとり、同時通訳的に対話集会を進行させるために、前日に会場でリハーサルも行いました。これはハンガリーで日本語とハンガリー語の同時通訳の真似事をした最初の出来事だったと思います。こうして、セルダヘイ大使とはほぼ10年ごとに、大きな仕事をしてきました。これは本当に縁があつてのことだと思えます。

皆様のお手許には出版社から直送されてきた書物があります。書店に並ぶのは3日後です。ほとんどの読者は、まず「まえがき」と「あとがき」を読まれることと思いま

す。そのことを考え、「まえがき」では本書の主要な要点を簡潔に明示しました。ここを読んでいただければ、この書物が何を解明しようとしているかが明瞭になると思います。私とサース教授は同い年ですが、私が経済学専攻なのにはたいし、サース教授は物理学者です。二人の専門分野には接点がありません。二人の出会いやサース教授の起業家としての苦難の道について、「あとがき」で記しました。また、書物の中ではオンコサーミアを利用した具体的な治療器や治療について記述していません。科学とビジネスをはっきりと分けるためのことです。それを補足する意味で、オンコサーミアを利用した治療の現状を「あとがき」に記しました。実際の治療に関心のある方はそれをご参照ください。

ここでは一つだけ、「これまでの温熱療法」であるハイパーサーミア治療と「これからの温熱療法」であるオンコサーミアとの本質的差異について、一言お話ししたいと思います。

すべてのがん治療の最大のテーマは「選択性」(selectivity)にあります。外科手術、抗がん剤治療、放射線治療のどの標準治療においても、腫瘍細胞・組織を識別し、がん組織だけを治療するというのは大きなテーマです。選択性が満たされなければ、副作用が起り、治療効果が著しく低下します。温熱治療においても、選択性をいかに達成するのかが標準治療と同じく本質的な問題です。ところが、伝統的なハイパーサーミアはその問題を明確に意識していません。健康細胞・組織まで温めてしまえば、温熱治療の効果がなければ、逆効果が生じてしまうからです。それが伝統的温熱治療の最大の欠陥です。この点では標準治療と同じ問題を抱えているわけです。

温熱治療における選択性と表裏一体のテーマは、体内に送り込んだエネルギーをいかに効率的に熱に転換させるかという問題です。伝統的なハイパーサーミアは体内に42°の「温度」を達成することを最

大の目標にしています。その目標達成ために、1kWとか1.5kWのような非常に高い出力を利用しています。サース教授はこれをマクロ加熱と呼んでいます。1.5kWの電気ポットで0.5lの水を温めるのに3分もかかりません。ところが、伝統的ハイパーサーミアは60分の時間をかけて、局所的に6ー7度の温度上昇を獲得しています。そこには膨大なエネルギーロスが発生していることが分かります。マクロ加熱では選択性が達成されないだけでなく、無用な熱を発生させるために、治療効果がでません。

このような伝統的温熱治療を根本的に見直さなければ、温熱治療の治療効果を出すことはできません。そのためには治療の目標そのものを転換する必要があります。オンコサーミアはマイクロ加熱の原理を適用し、局所的な細胞レベルの加熱を行います。時代がガソリンエンジンによるマクロの爆発燃焼から蓄電池のマイクロ燃焼へと変わりつつあるように、むやみに高い出力で体内に熱を発生させようとするのではなく、マイクロの加熱に転換することによって、エネルギー効率が格段に高まります。これはハイパーサーミア加熱のパラダイム転換を必要とします。「42°の絶対温度」の達成を加熱目標にするハイパーサーミアは、いわば「温度信仰」にもとづく治療です。これにたいして、オンコサーミアは温度水準を目標にするのではなく、細胞膜の内と外との温度勾配(格差)を生じさせることを最大の目標にしています。ここでは温度が加熱を制御するパラメータではなく、実際に患部に届くエネルギー量(ジュール)が制御パラメータになります。

このように、従来のハイパーサーミアの原理を根本的に転換することによって、温熱療法の選択性と効率性を抜本的に高める方法がオンコサーミアです。まさに温熱治療が腫瘍治療として生き残るとすれば、オンコサーミア以外にありません。これ以上の説明は、書物をご覧ください。

(もりた・つねお 立山R&Dヨーロッパ)

『腫瘍温熱療法－オンコサーミア』出版記念会に参加して

笠原 祐子

爽やかな風吹く緑鮮やかな時節、6月5日夜港区三田にあるハンガリー大使館にて、サース・アンドラーシュ/盛田常夫著『腫瘍温熱療法：オンコサーミア』出版記念会が開催されました。出席者は千葉大医学部松原教授や千葉県がん研究センター永瀬所長など医学・獣医学に携わっている方々、「1/fゆらぎ理論」の日本の第一人者である武者利光東工大名誉教授、歴代駐ハンガリー日本大使、斉藤惇東証社長ほかの企業経営者・エコノミスト、美容関連の経営者など多彩な方々総勢60名、そのなかに獣医学専門の秋篠宮紀子様の弟君の川嶋舟さん、指揮者の小林研一郎さん、料理評論家の山本益博さんの姿も見えました。

ハンガリー大使の流暢な日本語によるフレンドリーな挨拶で会は始まり、くしくも10年前、盛田さんの訳書『異星人伝説』の出版の際も、同じくここハンガリー大使館で同じセルダヘイ大使によって記念会が開催されたとのこと、大使は再び盛田さんご縁があったことをたいへん喜んでいらっしゃいました。

この後、盛田さんの挨拶、続いてサース・アンドラーシュ教授の講演がありました。従来の温熱療法と比較しながら、自らが開発したオンコサーミアの理論について英語でお話になり、盛田さんが通訳なさいました。カラーのアニメーションをふんだんに使ったスライドによる解説によって、従来の温熱医療の問題点、市場で入手できる機器のメカニズムが紹介され、それとの対比でサース教授のオンコサーミア理論について解説され、専門外で素人の私でもその概念がわかり、大変優れた治療法であることがよくわかりました。個人的には、小さいときから病気がちで薬漬けだったことから、大人になってからは副作用の多い薬に疑問を抱き、東洋医学やホメオパシー、アロマテラピーなどに関心を持つようになりましたが、オンコサーミアがたんなる腫瘍治療法というだけでなく、副作用なく生体の自然回復力を促進する自然療法であるという点が非常に興味深く、今後ますます人々に注目される点なのではないかと思いました。きっと、手術が難しいとされる腫瘍に苦しんでいる人々を助けることができるものと思いました。そして、人間だけでなく、動物や小さなペットたちの病にも、そしてもっと幅広い分野でも効果を発することができるのではないかと期待したいです(日本では動物用の腫瘍治療器の販売が予定されているということなので)。

生体治療についての講演の後には、心の治療、癒しを・・・(大使の受け売り!)ということで、講演後はミニ・コンサートが始まりました。ブタペストに拠点を置き、世界各地で演奏活動をするピアノ

スト関野直樹さんと、日本とハンガリーで活動中のヴァイオリニスト浅野未希さんの共演でした。ハンガリー人作曲家を中心に4曲(バルトーク「ルーマニア民族舞曲」、リスト「愛の夢第3番」、リスト「ラ・カンパネラ」、モンティ「チャールダッシュ」)の演奏がありました。関野さんはハンガリー留学中に盛田さんのお世話になったことがあり、浅野さんは盛田さんの次男の奥様という関係で今回のコンサートが企画されたようですが、たまたまステージの後ろには、バルトークとリストの彫像がおりてあり、二人は作曲家に見守られるような形で、素晴らしい演奏を披露してくださいました。

アンコール曲、ブラームス「ハンガリー舞曲第5番」が終了し、関野さん、浅野さんが退場すると同時に、盛田さんが最前列に着席なさっていた指揮者の小林研一郎さんに「閉会の辞」お願いすると、小林さんは何やらブツブツ、モゴモゴ・・・しばらくしてお立ちになり参加者に向かって話し始めましたが、閉会のご挨拶は無視



サース教授



レセプション (マエストロ小林とセルダヘイ大使)

なさり(?),直前に演奏された二人に対してアドバイスをしたいと言い出されました。これはコバケンの常套手段のようで、これで場を盛り上げようということのようでした。関野さんと浅野さんはシナリオにない展開に少々戸惑いながら、再びステージに戻り、コバケンのワンポイント・アドバイスが始まりました。サース教授は何事が起ったのかと心配気でしたが、盛田さんはいつものレッスンが始まったという気配でした。

指揮者がタクトを体の前でチョコチョコ動かしてもオーケストラに伝わらないように、楽器演奏も同じこと、大きな振りで情感を表してはいかがですかとのお言葉、奏者の二人、小林さんの指示通りにさわりだけ演奏してみると・・・、まさにコバケン・マジック!たった一言でこんなにも印象が変わるものかと驚くほど演奏に表情が加わりました。さすが、世界のコバケン!その威力を目のあたりに拝見させていただくという貴重なワン・シーンとなりました。そして最後にはまたまたサプライズ。小林さんが出版記念会のために準備された「今日この佳き日に」をピアノの弾き語りで歌われたのです。参加者の方々、予期せぬ小林さんの素敵な歌声にうっとり、拍手大喝采でした。

ミニ・コンサートが終了すると、ヘレンドの陶器で飾られた部屋で立食パーティーです。ハンガリーのワインとハンガリーの伝統料理が用意され、歓談のひとつき。私はまず白ワインを片手にお料理へと一目散。あとでお話させていただいた大使から聞いたところ、伝統料理と新しいお料理がミックスされているということで、どのお料理も美味しくいただきました。

皆さん、お料理も一通りいただいたあと名刺交換など話が盛り上がっている中、私は何人かの女性参加者の方々といさづを交わし、料理評論家の山本益博さんご夫妻のお姿を見つけました。以前、グルメの間で評判の小さなフレンチレストランで食事をしたとき、帰り際に「今まで山本益博さんがこちらの席にすわってらしたんですよ」とシェフに言われ、そのことを話題に話しかけてみたところ、ご夫妻ともとても気さくにお話してくださいました。更なる偶然の重なりは、山本さんはアメリカで上映された(日本では未公開)「Jiro Dreams of Sushi」という映画のナレーターで登場していますが、同席していたサンフランシスコから来日していた友人がその映画を見ており、話は益々盛り上がりました。山本ご夫妻のお嬢様が、現在ハンガリーで盛田さんのお世話になっているとのこと。盛田さんが仕事や著作活動だけでなく、民間レベルでもハンガリーと日本の架け橋となって活躍されていることを垣間見ることができた日でもありました。

盛田さんは食べる暇もなく忙しく、いろいろな方々とお話しているのを見かけましたが、サース教授はというと、おそらく講演のあ



コンサート



セルダヘイ大使挨拶

った部屋ですずっと専門的な質問に追われていたのではないのでしょうか、ほとんどの参加者が帰られたあとにお料理の間へと現れ、数名で静かに食事をなさっている姿を見かけました。

サース教授率いるオンコターム社が開発・製造した医療機器は、現在主にドイツの病院やクリニックで使われていて、日本ではまだ輸入されていないそうです。それでも、日本の大学などでも講演が開催されるとのこと。オンコサーミア理論が日本でも早く認知され、その機器が医療・美容、スポーツ界で幅広く使われるようになることをお祈りします。

サース教授と盛田さんの出会いはたいへん奇遇な巡り合わせによるそうですが、そこからたどり着いた 「今日この佳き日」が未来の発展へとつながりますように!

(かさはら・ゆうこ BYOOL代表)

癌患者の友に学ぶ

もう、Tさんとは8年のつきあいになる。一度も会ったことはない。何度か写真を送っていただき、おそらく私と似た60代前半の年齢の母親ではないかと想像している。年に2-3度、いつも美しい封筒に、A 4の紙一杯に描かれた、楽しい漫画やイラスト入りの手紙をくださる。漫画がとても上手で、簡略な線が特徴的な動きを捉えていて面白い。

彼女との付き合いは、思えば不思議なものである。私がブダペスト滞在の暮らしを綴った『きいろはハンガリー色』というエッセイを出版したのが2004年夏。その秋の日に、一通の丁寧な葉書が届いた。そこには、ご自分が癌患者であること、余命5年と宣言されていることなどが書かれており、私の本を読んで、「生きる勇気を与えられた」と感想が書かれていたのである。私は、特に病気に触れた文章を書いた覚えがなく、癌患者に希望を与えるメッセージも、まるで思い当たらなかった。ただ、そのとき、私の文章で、たとえ地球の中の一人にでも、少しの勇気を与えることができるのだとしたら、私の文章には価値があると、勇気をもたらしたのは、実は私の方であった。

Tさんは、末期癌患者であるが、「5年」といわれた余命はとっくに過ぎて、すでに「8年」も月日が経っている。彼女は延命治療をしないことを自ら選び、現在、緩和ケアを受けながら、外国旅行に一人で出かけ、積極的に国際交流をし、できることは何でも進んで行動し、活動して、信じられないほど前向きな暮らしを続けている。

Tさんが所属する癌患者の団体で発行している、「癌新聞」に記事が掲載されているのを送っていただいた。なんとも壮絶な病気との闘いの痕が、数行の中に読み取れる。47歳で胃がんのため胃全摘。49歳で膵臓がんを発症、膵頭、十二指腸、胆のう、胆管を摘出、57歳で肺がんが発見され、右肺中葉を切除。59歳で肺がん再発。この後、Tさんは、積極的治療は望まず、緩和ケア外来を探して、目指すドクターに

会った。それが東芝病院の茅根先生だという。偶然にも、私の長男が東芝(株)に勤務しており、何のアドバイスもできない私は、そんな小さなことを知るだけで、ご縁が繋がるようで嬉しくなった。Tさんは、自分のことを「近代医学から見放された末期の癌患者」と呼ぶことを真正面から恐れない。

そんな彼女から、最近届いた手紙に、また驚かされた。可愛い二人のお孫さんを抱き、舞台衣装のような優雅なドレスを着て、髪にも大きなお花をつけた、にこやかなTさんの新聞掲載写真が同封されていたのである。説明には、「孫たちとおしゃれをして、写真屋さんで写真を撮っていただきました。こんなことに挑戦するだけでも、気がまぎれ、わくわく感が蘇り、病気の進行も遅らせているようです。」とあった。

彼女の、この明るさと強さは、どこからくるのだろう。予期しない不運が襲ってきた時、人は運命を恨んだり、自暴自棄になったり、あるいは落ち込んで鬱になったりしても仕方がないだろうと思うのだが、どれだけの人が、自分の不幸をそのまま冷静に受けとめられるだろう。いつも手のひらを返すように、彼女からは眩しい光が投げかけられてくる。特に際立った問題も心配もないのに、わざわざ身の回りの小さなことを問題視して、愚痴を言っている自分が恥ずかしくなる。勝手に人生を捻じ曲げて無駄にしていると反省しきりである。

彼女には、恨みや妬みが見当たらない。誰かの慰めを期待しているわけでもない。何事に対しても自然体で、運命をそのままを受け入れる純粹さと冷静さと心の大らかさがある。できる精一杯のことをできる範囲で楽しみ、日々の暮らし一つ一つを、とても大切にしている。本当に羨ましいくらい、人間としての完成度が高いと思う。

先日、ハンガリー大使館で、『腫瘍温熱療法－オンコサーミア』出版記念パーティーに招待いただいた。サース・アンドラーシュ博士(ハンガリー)が提唱し、現在、絶

大な実績をドイツの病院を中心に展開している医学療法の紹介書籍である。ハンガリー駐在時、大変お世話になった盛田常夫氏が翻訳したものだ。それによると、－42度の温度水準を腫瘍組織に獲得することを目標とする従来のハイパーサーミアという方法は、熱で腫瘍細胞を焼き切り、腫瘍細胞を壊死させる手法と理解されているが、この手法は周囲の健康組織も同時に温めてしまう等、問題も多く、現在行き詰りつつある。サース・アンドラーシュ博士の自然療法としてのオンコサーミアは、腫瘍細胞に選択的に熱を送り込むことで、機能を停止している自死のメカニズムを復活させることを目的とする。選択的加熱の要点は、細胞膜の内外の温度勾配(温度差)を作ること、細胞膜の内と外に温度差を創出させることが目標となる。この治療は正常なホメオスタシスの回復を促すことを重視したもので、これからの癌治療は薬剤や手術にたよる西洋的治療と自然的な治癒を優先する東洋的治療を結合させることが不可欠ーというものだ。

韓国では、数年前からサース博士が開発した機器が導入されていて、現在では主要な大学病院ほとんどでオンコターミア温熱治療が行われているというが、日本は、これからの導入となる。とても興味深い内容の博士の講演会だった。

癌患者の中には、時間が迫っている人達がいる。日本の病院のシステムとして、製薬会社他のしがらみで、なかなか新しい機器を導入するまでには時間がかかるということだが、本当に良い機器なら、迷わず、早く認可導入してほしい。まっさきに、試してもらいたいと、Tさんが頭に浮かんだ。

末期癌患者のTさんに元気をもらい、教えられることは、いつも少なくない。静かに、祈るような気持ちで、今回のお手紙も読ませていただいた。

(せがわ・ちえこ エッセイスト)

近 況

金子 三勇士

今年の3月、無事東京音楽大学のピアノ演奏家コース・エクセレンスを卒業し、2度目の大学生生活が終了しました。「卒業」と言いましても、卒業式は本番と重なって出席出来ず、夜の謝恩会だけにはなんとか間に合い皆とお別れが出来ました。そんなこともあり、正直まだあまり実感はありません。4月からは同大学院の鍵盤楽器研究領域に進みます。



昔の事をお話しますと2006年にブダペストのリスト音楽院を終了し、その後自分のもう一つのふるさとである日本で音楽の勉強を続ける事を決めました。一般的にはクラシックの本場であるヨーロッパの大都市や音楽マーケティングの市場であるロンドン、ニューヨークに留学するのが自然ですが、私は親戚からのオファーもあり、あえて東京を選びました。東京も世界の大都市。日本人でもある自分として、あまり一般的ではない方法で日本スタートの国際的音楽活動が出来たら面白いと思いました。当時16歳の自分はいきなり日本に「帰国」するにもやはり学校に入る年齢。しかし、ハンガリー生活が長かったため日本語は他の学生より不自由。そのある意味ハンディーを持ちながらただ一カ所、すぐに入学を許可してくれたのが東京音楽大学の付属高校です。16歳ですので、2年に編入し、高校卒業後は同大学に進む事を希望しました。

大学ではハンガリーとはかなり違った学生生活が待っていました。リスト音楽院では大学と高校を同時進行に通いながら各学校で一般科目と音楽科目を勉強していました。これはとても大変な事で、毎日のように読まなければならない本、書かなければならないレポートそして準備をしなければならぬプレゼンテーションが山のようでした。そんな中でのピアノの練習、レッスン、室内楽、音楽理論、作曲、指揮。食事や睡眠もまともにとれない毎日でした。それに比べて東京音大はそこまでハードなスケジュールではありませんでした。こちらも一般と音楽の科目がありましたが、授業内容は全然違って自由な時間もとれるカリキュラムになっていました。私は個人的に音楽を勉強するには自由な時間もとても大切であり、作品をイメージするには自由に考える事が大切だと思います。音楽は芸術ですので、自分の世界観を広げるのには勉強以外にも様々な事を経験する必要があると考えています。

大学での一日は朝のピアノの練習からはじまっていました。音大ですのでピアノ入りの小さな防音室が沢山あり、前もって予約をするとどの学生でも使えます。午前中から夕方までは授業とレッスン。間の休憩時間では新聞を読んだり、お菓子を食べたり、友人たちと楽しく過ごしたりしていました。お昼は仲間と一緒に学食や近くの定食屋さんで食べる事が多く、リスト音楽院時代と違って友達と一緒に時間が長くなりました。友人達との会話の中では皆それぞれの悩み、考え方や思い、将来のプランなどを話し合い、お互いにとって貴重な時間です。授業はなるべく日本でしかとれないものを選択しました。文学、日本史、憲法など。どの科目も最初は難しかったのですが、そのうち漢字もだいたい読めるようになり、内容も理解出来るようになりました。ピアノのレッスンでは3名の先生方に定期的にピアノを聴いていただき、色々なアドバイスを受けるながら曲を仕上げていく作業をしています。

そんな大学生生活の最後、今回の東京音

大シンフォニーヨーロッパ演奏旅行に参加する事になりました。私達新卒生にとってはまるで卒業旅行のようで、皆とても楽しみにしていました。

私はブダペストとグラーツの2公演で学生仲間の皆とリストのピアノ協奏曲第1 番を弾きました。そして指揮者は小林研一郎先生。小林先生は個人的にも長年お世話になっていて、小さい時から色々と音楽的アドバイスを受けているだけあって、この共演は本当に夢のようです。プロフェッショナルオーケストラでは味わえないような凄い空間の中、無事2公演が終わりました。ブダペストでの演奏会も久しぶりで、MUPAで弾けた事は本当に光栄です。また是非、今度は学校の行事ではなく、プロのピアニストとして戻ってきたいと思っています。

プロといえば、私は3年前に日本の大手音楽事務所に所属になり、昨年リスト生誕200周年に合わせて正式に日本の音楽界にデビューする事ができました。おかげさまで今は年間50公演ほどのご依頼をいただいています。日本各地はもちろん、海外でも公演する機会が増えています。今まで行った事のない国で、色々な人々の前で演奏出来るのは本当に幸せな事です。それに、地元の名物で美味しいものも沢山食べる事ができますし!

日本でのクラシック音楽の世界はまだまだこれから広がって行くように感じられます。昨年の大震災の後も音楽の力はいかに大切か、改めて実感した方も多いかと思います。しかしチャリティーコンサートやテレビを入れての特別イベントが本当の復興ではないと考えています。これから音楽の本当の力をかりながらどのような事が出来るか、なにをするべきか、ゆっくり考えていきたいと思っています。一つたしかなのは、音楽は世界共通で、人類にとってはなくてはならない芸術であること。そして音楽は人になにかを感じさせ、思わせてくれる力がある事です。

(かねこ・みゅうじ ピアニスト)

マグロと目が合った

町野 憲善

クロアチアの海岸線を旅すると、遊漁船の看板を良く見ることがある。マグロが如何にも簡単に釣れるような内容であり、写真であった。いつかチャンスがあれば、一度はクロアチアでＴＶのマグロ釣り名人、松方弘樹と同じ気分になりたいと、実現性は限りなく少ないと思いつつ、微かな希望を抱いていた。

私は元来、魚釣りが好きで、浜名湖の湖内を9.9馬力のマイボートで、小魚を中心に毎年、春先から秋まで釣りを楽しんでいた。私は釣り好きではあるが、釣れない魚は狙いたくない。釣に行ったら、少なくとも10匹は釣れる魚しか狙わない。何回もトライしても、3回に1度ぐらしか釣れないような難しい高級魚は嫌いだ。いわし、さば、キス、はぜ等のように、必ず、釣果のある釣りが好きである。要は本格的な釣師ではなく、ファミリー釣師(これを釣師といえるか疑問だが)。

去年はマス釣りにとスロベニアに誘われたが、予定がつかず、諦めた。その時は爆釣とのことで、誠に残念な思いをした。本年、3月末に5月の連休中にクロアチア(ロヴィニ)でマグロ釣りの話が持ち上がった。マグロはめったに釣れる魚ではなく、私の釣り哲学から外れた難しい高級魚であり、どうするか悩んだ結果、坊主では帰さないとの船長の話を信じてマグロ釣りを目指すことになった。

まあ、ルーマニアのブラン城観光の帰り道であるから、寄り道すれば丁度良い勝手に思い込んだ。(しかし、この理解は全くの間違いで、方向音痴の極み。実際はブラン城から1泊2日でなんとブダペスト経由で、クロアチアのロヴィニが最短時間と気が付いた時は既に遅かった。)

5月2日夕刻、ロヴィニに到着、合流した4名(家内を含む)は、前夜祭として、港近辺の魚レストランでマグロステーキとソーヴィニヨンブランで氣勢を上げた。予約した

部屋はもちろんキッチン付で、そこで、刺身と煮魚料理が出来るように調味料、まな板、出刃包丁、刺身包丁を持参。予約段階で情報交換した船長からはマグロはキャッチ&リリースがルールとのこと。その他の、外道は持ち帰り可能とあった。キャッチ&リリースとは半信半疑であった。釣りは8時間コースと12時間コースが選択できる。当日は宿泊するため時間に余裕があり、12時間コースを決める。

5月3日(木)、朝8時過ぎに釣船に手ぶらで乗り込む。(食事、飲み物、釣りえさ、道具は料金に込み)。30フィート強のボートだが、余り外観はカッコが良くない。無骨な漁師船とプレジャーボートの中間的外観であるが、安全性は高そう。乗り込み時に驚いたのは撒き餌に使う、小いわしを40kgほど持ち込んでいたこと。これを見て、本当にこれからマグロを狙うのだと身震いした(マグロ釣りの予備知識は全く無いが、直感)。

40フィート以上の大型外洋ヨット、超高級クルーザーの間を縫って港を出る。1時間ほどで、先ずは腕試しに持ち帰り用の雑魚釣りに励む。水深40m、仕掛けはサビキ(クロアチアでも、サビキの名前が生きている)か、イカを餌の底釣り。魚探で狙った場所に船を留めて釣る。底は砂地で涌き水となっているのか、時々気泡が上がってくる。船長の声でラインを下す。即、アマダイのような、ピンクのタイ系が次々と上がってくる。入れ食い状態。鯖、アジ、イワシの青さかなを希望するが、全く釣れず。船長も竿を出すが、アマダイもときだけ。大小、混ぜて、100匹ほど釣れたので昼食、ペンネにビール。

昼食後、本命のマグロ狙いで場所を変えろ。更に30分ほど沖合いにでる。これと見据えた、マグロの道に持ち込んだイワシを微速前進で、撒き餌してゆく。撒き量が持ち込んだ量に比較し、少なすぎるのではと心配した。ループ状に撒き終えたらアンカーを打ち、マグロ用の大型リールを船首からおもむろに4セット持ち出した。いよいよ、マグロ釣りだ。ＴＶで見ると、極太

の竿。黄金色に光る超大型リール(イタリア製、2000ユーロ/セット)が燦然と輝く。船長が使った仕掛けは風船をうき代わりとした、浮かせ釣り。餌はイワシ。本来であれば、昼食前にサビキで釣れている、生きイワシが使われるはずであった。しかし、イワシは1匹しか釣れていなかった。船長が竿を出した訳がここで解った。もっと生餌用のイワシが欲しかったのだ。本来、イワシぐらい何処でもつれる、浜名湖でも直ぐ釣れる。なぜ、生餌のイワシが欲しければ、場所を変えなかったか。不信心一杯。前途不安。

なにやら、船長と、アシスタントがガサガサ探し物をしている。船長が言った言葉は、「家にイワシの鼻に刺すハナカンを忘れた」と。そこで、貴重な一匹のイワシ鼻にド太いマグロ針を直接差し込む、無残にイワシの鼻は折れ、崩れる。当たり前ではないか、太さ3mmほどのマグロ針をイワシの鼻に直接差し込む神経が解らない。釣師は繊細で用心深く、時には大胆で、魚の心を読める。この船長の技量と人間性を疑う。こんなテイタラクな船長の下でマグロが釣れるはずがない。これでよく長年マグロで食っていったものだ。まだ、30歳台後半の男だが、情けない。しかし、船長は動ぜず、もくもくと撒き餌用のイワシの頭と尾を取り、針に二匹掛けした。

4本の竿のラインに浮き下をそれぞれ4段階に変えて、風船(夜店で売っているもの)を輪ゴムで留めていく。4本出し終えたところで、船長はマグロが釣れたときの体の使い方を教えると言う。少なくとも釣りを経験している者にそんなことは必要ないと思ったが、船尾にセットされているファイト用の足掛け付のステンレス椅子は只者ではない。先ず船長は言う。「マグロは腕と背中であつて釣るのではない。太ももであつて釣る。」

何のコツチャ。船長は模範演技をする。先ず、ステンレスシートの座面上に特製の座布団を敷く。その座布団の後ろ半分には30cmほどの高さの硬い柵を取り巻いている。船長はどっかりと座布団に座りリール

を持つ、その座布団から出ている紐の先端のフックを大型リールの両端に掛ける。これで座布団とリールと竿は一体となる。それからラインの巻き上げ方である。先ず、竿の角度は変えず、ラインを巻き上げながら、椅子の上を、座布団ごと尻を前方に滑らせる。そのため両足は曲がった状態となる。滑らせたなら、曲げた両足を突っ張って伸ばす。必然的に、尻は座布団ごと後ろに滑って移動する。また同じ動作をする。こうして、腕と背筋を使わずにマグロを仕留めるのである。太ももの方が、背筋より耐久性があり、強靱である。納得。

4名がそれぞれ実習を終えたら、船長は曰く。誰が最初に釣るのか?釣る順番は?竿は4本ある。それぞれの竿に各自の名前をつける、アミダで順番を決める?アミダに強そうな若者がアミダで行きましょう。よしそれで行こう。ラッキーにも私が一番くじ。後はマグロが掛かるまで、寝て待とう。左舷に設置してある、自動撒き餌機がセットされたタイマーに従って、イワシをミンチにして海に定期的に自動落下させている。その規則的なゲー音が耳に心地良い。

ペンネとビールのお陰で、1時間ほど寝たと思う。いきなり、右舷後方の竿のリールがけたたましく鳴り、金属音が響く、ラインが物凄い勢いで伸びている。船長が大声で、アシスタントに残りの3セットのリールを仕舞うように怒鳴っている。

船長は落ち着いていた、「来た来た来た」と満面の笑みである。我々はボケッと、その動作を見ていた。マグロが付いているはずの1セットだけになった後、船長は「誰がファイトするのだ?」。思わず、手を上げた。先ず、ステンレス大型チェアの座布団の上に座る。船長のアドバイスの従い、座布団から出ている2本のフックを大型リールの左右に掛ける。これで、足を突っ張っていないかぎり、竿と座布団ごと、海に引き込まれる。まだ竿はたせてくれない。リールはまだドラッグの空転の音がしてラインは出てい

る。船長から竿を受け取り、そのリールの左側にあるハンドルを握り、右手は竿とリールを結合してある、金属ロッドに置く。船長は準備できたかと聞く。ＯＫと頷く。船長は徐々にリールのドラックを締め込み、ラインを出方を押さえていく。その反動で竿が海に持っていかれる。ある程度締めこんだところで巻き上げろの合図。その時、ラインは300mほど出ていた。



事前の練習のごとく太ももを使った巻き上げを試みるが、上手くいかない。5～6回ほど続けるうちに要領を得た。船長はその調子とおだてる。地球を釣ったかの様な手ごたえの無さ。ただ重いだけ、ラインの先端に何かが居て、もがいている感じはない。それでもゆっくり、確実にラインを巻き上げる。その途端、ドラッグがけたたましく鳴りラインが出て行く。この繰り返しである。10分ほどすると、ラインの先端に生き物がいる手ごたえが伝わってきた。20分ほどすると、ラインは左右に大きく振り始めた。もがいている。ラインは残り、100mほど。ここからの感触、手ごたえが釣の醍醐味である。

小さい魚であれば、細い繊細な竿で、敏感な感触を味わい、大型魚は無骨なただ頑丈な竿で力の感触を味わう。24分ほどすると海中に白いものが見え隠れするようになる。どうもマグロらしい。あと一歩だ。船長は操船中のアシスタントに、マグロが船底に潜り込まないように細かく、船尾の位置を指示する。白く、銀色に光り輝いた腹

が見えるようになった。綺麗だ、まさしく本マグロである。背中の黒と腹の白さが、何ともいえない美しさ。更にアドリア海の青さ。船長はゲームであれば、10mまで引き上げた段階で釣果にカウントされる。「ラインを切るか?」。私はリリースするとしても、船腹にマグロを横付けさせるまで、頑張ると伝える。その段階で、船長は黒マグロの重量は70～80kgと目算。

慎重に右舷後部にマグロを横付け、頭が水面から出た瞬間、マグロの左目と目が合った。何とも言えない一瞬である。マグロは力つきていた。少し悲しいような、涼しげな丸い目をしていた。左の口元から針が覗いていた。一瞬のうちに、船長がラインを針の所で切断した。黒マグロは疲れのためか漂い、そのまま斜めに船首の方向にスーと姿を消した。終わった。どっと疲れが出て、気だるさを感じた。ファイト時間25分。

最後にキャッチ&リリースの理由。黒マグロは地中海、アドリア海等の海域で資源保護のため、漁獲割り当て制となっている。周辺国がそれぞれの割り当て高をもっている。クロアチアはその分を総て、漁業関係者に配分してあるため、遊漁船には割り当てが無い。だから、リリース。秋までに割り当てを満たせない量があれば、遊漁船にも割り当てを貰える。

(まちの・のりよし マジャールスズキ)

妃の街ヴェスプレーム便り その3
楽しみ

森田 友子

まず、一年で一番楽しみにしていること、ヨーロッパに住むようになってからは、それは「春の訪れ」になった。冬の終わりを告げるスノードロップ(hóvirág)が見られるようになると、「森のラムソン」と「庭のつくし」が待ち遠しくて仕方なくなる。

ラムソン(Medvehagyma)はにんにくより香りが弱い、ほうれん草とニラの間のような植物で、森で採集できる。市場で目にし始めたら、次の週末あたりに森へ出かける予定を立てる。マーケットに最初に出まわるのは、おばさんたちが売っているものでも、畑で栽培されているのもあるから、少し待つのだ。だいたい3月末から4月中旬が、やわらかくて一番おいしい時期。毎年同じ所に生えてくるので、一箇所場所を覚えてしまえば、新鮮で、本物の森の産物が手に入る。

ただ、有毒なスズランと間違えやすいので、お気をつけを。見分ける方法は、匂いのみだが、習得してしまえばキノコほど識別は難しくない。中華風卵とじスープや餃子にはあつらえ向きだし、塩と(オリーブ)オイルでペーストを作れば長期保存が可能で、それをトーストにつければ立派なオードブルにもなる。色がとても鮮やかなので、初春の食卓を彩ってくれる。

ツクシはスギナ(mezei zsurló)の胞子茎なので、主人と父(両者、植物が専門)にラテン語で確認してもらったところ、一致したので食している。なんと、我家のもみの木の間に生育しているのだ。たくさんあれば、ハンガリー在住の皆さんにお裾分けしたいところだが、小川に近いところでしか採れないので、残念。

それから、ゴボウも庭で採れる。ハンガリーのbogáncs(正式名は、bojtorján)というくっつき虫(服につく種子)の根がそれ。日本のより細くて短く、アクも強いので、調理時間は少し多めにかかるが、香りと歯ごたえはたまらない。近くの森で栽培されている生シイタケが手に入るようになれば、タケノコがなくなたって、これで春の味は揃ったも同然、我家の旬である。

暗くて長い冬のヨーロッパでは、兎にも角にも待ちわびる「春」だが、嫌だ、嫌だとはばかりもいってられないので、冬の楽しみも作るようにした。それは、1月末になるとやってくる。我家には、専門鑑定人協会、狩猟協会、そして、こどもの通う小学校から届く。冬の締め行事、「舞踏会(Bál)」の案



内である。日本語で書くと仰々しいが、ダンス場も設置されるパーティーのことで、おいしい料理を食べて、おしゃべりを楽しみ、夜明けまで踊る。このタイプのパーティーは、卒業式や結婚披露宴、大晦日にも催される。私は、踊れなくても、踊るのは好きなので、招待状を並べて、場所と料理と費用を比較し、どれに参加するか決めている。

一方、主人の楽しみは、狩猟、チェス、サッカー、そして、タロック。いかにもヨーロッパならではの娯楽。この中でも、馴染みの薄いタロック(tarokk)は、日本では、タロット占いで知られているが、ハンガリーでは、歴史あるカードゲームのこと。

15世紀前半にイタリアで発明され、ハンガリーには、二重帝国時代に広まった。カードゲームといっても、当時から、ギャンブルではなく、紳士の遊びとされていて、現在でも、点数が1〜10Ftでプレイされている。昔、農村では、重要な地位にある人(役人、地主)や学識層(牧師、医師、林業技術士)が集まり、娯楽と社交、集会を兼ねたものだったという。確かに、主人のグループのメンバーも、医者、薬剤師、林業技術士が顔を連ねている。なぜ今でもこの専門家た

ちが揃うのかというと、遊び方は、大学の先輩から伝授されるからだそうだ。

ルールはトリックテイキングで、パートナーを組んでプレイする。花札のような役があり、その役を予め宣言することもできる。かなり複雑なゲームだが、雰囲気は、マージャンに似ている。主人たちは、5〜6人で、週に一度、夕方から夜中まで遊んでいる。各家庭を循環するので、我家にも、1ヶ月半に一度は順番が周ってくる。夕方6時からいから始め、夕食時以外は殆どおしゃべりもしないで、夜中12時まで真剣にカードをしている。これが20年以上続いているので、余程好きなんだろう、と半ば感心する。地方や外国に住んでいて、帰省時には必ず参加するメンバーもいる。

ハンガリーでは、楽しみを大人だからとか、小さなこどもがいるから、といって我慢しなくてもいいように見える。間もなく始まるバカンス(Vakáció)も、こどもだけでなく、大人も随分楽しみにしているようだし、普段でも、こどもは預けて出かける、というのが至極当然で、健全に生活するための息抜きが、社会的に大いに認められているような気がする。勤勉で働きモノの国から来たものとしては、違和感を覚えることも少なくないが、半分参考にしたいと思っている。

主人を見ていても、好きなモミの木を日々育て、日常の刺激になる鑑定の仕事をたまに受け、家のことやこどもの世話を程々にしながら、趣味にはたっぷり時間をかけている。タイムマネジメントが上手いのか、単にタフなのか、優先順位が違うのか?その横で、ただ指をくわえて見ているのも癪なので、私も見習って、長年諦めていた乗馬だけは、たまの楽しみにすることにした。日本から離れてできなくなってしまったことを悲しむのではなく、ここだからできることに焦点を当てて、ハンガリー生活を楽しみたいと思う。

(もりた・ともし ヴェスプリーム在住)

ヴェスプレーム「日本の日」を終えて

5月末、ヴェスプレーム県ハンガリー日本友好協会の第2回「日本の日」が開催された。今回は、パンノン大学、ヴェスプレーム市、在ハンガリー日本商工会の支援を受けて実施された。様々な日本文化が紹介され、2日間で約2500人の訪問があった。事業内容は大使館HPにも紹介されているが、この予算と人員で、よくできた、と思えるものだった。

翌週の「カイゼン会」では今後の課題が話し合われ、こんな大仕事を、本当にまたやりたいのか?という意見も出たが、第3回が、2013年10月に予定された。次回はあれもこれも取り入れるのではなく、テーマを絞った事業を考えている。

この非営利団体は2年半前に設立され、ハンガリー日本友好協会の支部ではなく、独立した法人機関として登録されている。在日暦10年以上の会長を初め、流暢に日本語を話せる研究留学経験者が数名いるおかげで、地に足のついた活動ができていると思う。

協会の柱となって支えているのが、素人の域を超えた、盆栽、折り紙、着物、剣道等に関わる日本伝統文化マニアさんたち。でも、それぞれがまったく異なる専門分野も持っているのも、おもしろい。

盆栽担当者は電気技術者で、普段は電気会社で働いている。だから、盆栽の枝を曲げる針金はゴム絶縁の電気ワイヤー。彼の運営する盆栽クラブは10年以上続いている、週末は機械油のついた手を拭って、新しい素材(植物)を探しに森に入るのが楽しみだそうだ。

折り紙の芸術家は養護学校の先生。長時間じっとしているのが苦手なので、職員会議の時でもミニ折り紙を引き出しから取り出して、始終指を動かしているのだとか。協会の集会でも、一瞬にして素敵な作品ができあがる。

着物の女性は気象学者だから、着物の伝統についてもかなり掘り下げて研究していて、その為にわざわざ日本まで行っている。着物の講演や説明はまるで大学の講

義・論文のよう。もう一人の女性は服飾デザインの先生で、着物に対しては、コスチュームの視点から興味をもっている。着物の染色で日本留学を目指している。

剣道担当の会員はヨーロッパチャンピオンになったこともある男女で、男性は日本の道場も巡って技を磨いている。先月のイタリアでの世界選手権大会では、彼の率いる剣道クラブが男子団体戦で、日本、韓国に次ぐ3位に輝いた。女性のバービーさんは、モデルなみの長身で、協会のマスコット人形的存在。また、写真が趣味なので、専属カメラマンでもある。

これまで既に5つ以上の事業や活動をこなしてきたが、イベント専門の団体でもないのにここまでやってこられたのは、愛日家で自分の意思で参加下さっている法律家、様々な公式行事を担当した元県庁関係者のおかげだと思う。事業によっては、複雑な法的手配や計画準備が必要なこともあった。また、旅行社が会員である為、運搬がとてもスムーズ。大使館や交流基金からは、多くの展示品をお借りすることができている。



施設に関しては、大学関係者も多いので、これまで3回の事業で、パンノン大学からの協力を得ることができた。そして、ヴェスプレーム県と岐阜県が、古くからの姉妹都市である為、これまでの国際交流の歴史が、活動をより豊かにしている。

こんな機関の中で、私は唯一ホンモノの日本人である。だから、協会の一員として手伝う半面、監査役のような気持ちを携えて参加している。中には、まだまだ遠い国ニッポン、う〜ん、ちょっとこれは、という

内容もあった。ニッポンが好きで頑張っている人の夢を壊さないよう、ホンモノに近づけるのは、結構努力を要する。現実的に追求できる限度もあるから難しい。今回、「錦鯉」のコーナーが設けられたが、展示するに相応しい本物を手配するのは至難の業であった。それでも、事業を盛大にとただひたすら牽引する会員と、何度も話し合い、使命感を持って踏ん張った甲斐はあったと思う。

今後もすべてのメンバーが「誠意」を持って携わっていくのであれば、事業回数を重ねる毎に改善され、より大きな協会に成長していくと信じている。そして、これこそが、まさに「日本」から学ぶべきことに思う。

一方、ハンガリー人との共同作業で、彼らから学んだことも山ほどある。彼らの仕事の一番素晴らしいところは、各自が本質を把握して活動しているところだと思う。本質を理解し自己判断して積極的に動くから、一々細かいことを決めなくても展開されていく。会長は存在するけど、司令塔ではなく、予算以外の方針や方法は、殆ど皆、独自に決めていく。脱線すれば、ちょっとちょっとと誰かが必ず指摘するので、大抵は本来の路線に戻る。だから、できあがる作品は、キチンとしていながらも、個性があってもおもしろい。

が、皆、それぞれに自己解釈し、勝手な方法、思惑でバラバラに動くので、それが災いすることも多々。そして、そんな仲間の行動は予測できないので、無駄手間、勘違いが発生し、共同計画が難。最終結果の形も、最後まで細かいことははっきりしないので、リスク高。

でも、コツさえ掴めてしまえば、一緒に仕事するのは、無限大に楽しめる。未知の可能性が埋まっているチーム、ヴェスプレーム県ハ日本友好協会、今後の活動も大いに楽しみである。

(森田 友子記)

夢だったバレエ留学

私がハンガリーに来るきっかけとなったのは、地元京都で行われたバレエコンクールでした。審査員の先生にハンガリーの学校を薦めていただき、スカラシップではないけど海外に行けるチャンスだと思い、留学することに決めました。その時はまだ中学3年生だったので高校受験をして、4月から学校に通い留学の間は1年休学しました。ハンガリーのことを全く知らなかった私は、同じバレエ学校に留学されていた先輩に学校の様子など色々聞いて教えてもらいました。小学生の頃から夢だった留学は日本を旅立つまで、期待と不安でいっぱいでした。

去年の9月にハンガリーに来て、見るものすべてが新鮮に感じられました。学校は建物がすごく綺麗で、教室の窓ガラスを通してレッスンが見られていいなと思いました。私のクラスはインターナショナルクラスで、クラスメイト全員のスタイルが良くて驚きました。一週間も経たないうちに、他のクラスと合同のレッスンがあり、社交ダンスのチャチャチャの練習が始まりました。他のクラスと合同のレッスンは月に何回かあり、違う先生に教えてもらい、ハンガリー人たちと一緒に踊ることは毎回すごく刺激になりました。先生たちは昔すごいダンサーだったんだろうなと思いながら、色々な先生たちに教えてもらうことができたのも良かったです。社交ダンスの経験がなかったので最初はどうすればいいか分からず戸惑っていました。でもハンガリー人の自然な動きとノリノリで上手に踊る姿を見て私も頑張ろうと思いました。そのおかげか試験は心から楽しんで踊ることができました。毎朝8時からのレッスンは絶対に辛いだろうと思っていましたが、夜早く寝るようにすれば意外に大丈夫でした。授業が終わる午後には色々な所に行きました。初めて王宮の丘でドナウ川とブダペストの美しい街並みを見た時は、本当に感動しました。こんな素晴らしい国に来ることができて良かったと思いました。大きなショッピングセ

ンターもあるし、地下鉄やバス、トラム(路面電車)などが使えて交通も便利で、予想以上に暮らしやすい町でした。ただ、一度だけ地下鉄でパスを提示する時に生徒証明書を持っていなくて罰金6000Ftを支払ったことがあり、その出来事はまだ来たばかりの頃の苦い思い出となりました。今は10000Ftも値上がりして罰金が16000Ftになっているので、もう二度と支払うことのないように気をつけています。生活をしていて日本のほうがやっぱりいいなと思うこともあります。洗濯や料理など自分でするようになり、仕事で疲れて帰ってきてから家事をしてくれていた母の苦勞が分かりました。

少しずつ生活や学校にも慣れてきた頃から、公演に出させていただくようになりました。学校では月に1回は必ずと言っていいほど公演がありました。冬に行われた10日間の「くるみ割り人形」の公演や、学校以外でのモダンの公演、ブダペスト郊外の公演などにも出演させていただき、リハーサルなどから学ぶことも多くて大変勉強になりました。舞台の床は滑るところがほとんどで苦戦もしましたが、そんなことは忘れてしまうぐらい踊り終わった後の客席からの拍手が大好きでした。ハンガリー独特のみんなで揃えて拍手をするというのが来たばかりの頃は驚きましたが、みんなが揃えるため迫力もあり、お客さんの気持ちが1つになって拍手に表れているような気がして素晴らしいなと思いました。

学校にはバレエ科だけでなくモダン科とハンガリアンダンス科があり、これらの踊りは公演で初めて見ました。モダン科は格好よくて、レベルの高さに驚きました。振付も音楽も動きもそれぞれ作品によって全く異なっていて、もう一度見たいと思うような作品がいくつもありました。そしてハンガリアンダンス科は歌いながら踊ったり、時にはものすごい速さでリズムをとったりとこちらも想像以上に凄くて圧倒されました。授業にはモダンやリズムなどがあり、バレエとはま

前野 詩織

た違って楽しかったです。

バレエの試験は前期・後期の2回で、普段のレッスンに成績をつけてもらうのは初めてのことでした。練習では技の成功率を上げるように努力したり、少しでも綺麗に見えるよう細かいところまで気をつけたりして、基礎を見直すいい機会になりました。試験の日はみんな同じレオタードを着て、髪の毛を綺麗に結びメイクもいつもより少し濃くします。試験が始まる前、優しい担任の先生は私たちが頑張れるようにエネルギーになるものを買ってきてくれました。大勢の先生たちがイスに座っているので、試験が始まるとやっぱり少し緊張して今まで何度も練習していても、いつもできているところを失敗してしまうことがありましたが、逆にいつもより上手くいくこともあったりしました。試験が無事終わった時は解放感や達成感でいっぱいでした。

私の中で特に印象に残っている学校行事は校内コンクールです。ソロと団体の両部門で1位をいただき、とても光栄で嬉しかったです。賞をいただいたことで少し自信もつき、もっと頑張って上手になりたいという気持ちになりました。オペラで行われる卒業公演がハンガリーで踊る最後の舞台となるので少し寂しいですが楽しみです。あの素敵な客席の景色を舞台から見ることできて、生のオーケストラで踊れるなんてこんな貴重なチャンスを与えていただき、本当に幸せです。卒業する9年生達の踊りはどれも素晴らしくて、自分もあんな風に踊れるようになりたいと思える最高のプログラムになっています。来年もこの学校に残ってもっと色々なことを学びたかったですが、1年だけと決めていたので卒業公演が終わったら日本に帰ります。

オペラには見たい作品があると、かかさず見に行っていました。有名な作品や、日本では見たことのなかった作品も見ることができました。日本に比べてチケットはかなり安く、500Ft(日本円だと250円以下)の席もあるから気軽に買うことができま

す。さらに学校が通常の半額の値段のチケットをくれたり、みんなでリハーサルを見に行ったりということもありました。舞台セットや衣装、演出などは凝りようが凄くて、さすが国立のバレエ団だけあってスケールの大きさが違いました。こんなバレエ団で踊ることができたらどんなに幸せだろうと思いました。秋休みには隣の国のオーストリアのウィーンに行って、ウィーン国立バレエ団の公演を見て、冬休みにはフランスのパリに行ってあの世界最高峰のパリ・オペラ



座の公演を二つ見てきました。また、2月にはスイスのローザンヌに行って、ローザンヌ国際バレエコンクールの決勝を見に行きました。どれも日本からではそう簡単に行くことができないので、外国にいる間に色々なところに行くことができて良かったです。他にもイタリアやチェコのプラハなどにも行きたかったのですが、後半はせっかく来たハンガリーで休みの日を満喫しようと思い、ドナウ川に浮かぶマルギット島やブ

ール、遊園地に行っていました。この10ヶ月近くの間、日本食が恋しくなることは少しあってもホームシックになることはあまりなく、あっという間に時間が過ぎ去って充実した日々を過ごせたように思います。ハンガリー語は最初さっぱり分かりませんでしたが、知っている単語が増えていくと楽しくなって日本に帰るまでにもっと話せるようになりたかったです。週2回のハンガリー語の授業で習ったことは、学校や日常会話でとても役に立ちました。ハンガリ



一語と日本語は少し似ているところがあって面白いなと思いました。また、ハンガリーに来て日本の文化の素晴らしさにも改めて実感することができました。学校の生徒でも日本のアニメやマンガ、歌などを知っている人がいたり、日本食が好きという人も多くて、クラスメイトたちと日本食を食べに行くこともありました。遠く離れた国でも、色々なところに日本の物や文化が存在していて、日本人として少し誇りに思えて嬉しかっ

たです。最後になりましたが、ここまで私のことを支えて応援してくれた両親や家族、先生や友達には本当に感謝しています。自分1人の力では絶対に留学することはできなかつたし、留学中もインターネットを使っている人と連絡を取ることができたから寂しさを感じずに頑張れたと思います。これからも感謝の気持ちを忘れないようにしたいです。日本に帰ったらハンガリーで学んだことを生かして、今まで以上に頑張って練



習し、将来はまだどうなるか分かりませんが素敵なバレリーナになって見に来てくださったお客様に感動を与えられるような人になりたいです。本当にハンガリーに留学して良かったです。またいつか機会があれば、ハンガリーに来たいです。

(まえの・しおり ハンガリー国立バレエ学校)



緑の丘補習校



“日本人だから...”の補習校

気が付くとハンガリーに来て1年半が経った。ここの前は日本、そしてその前はスウェーデンに5年住んでいた。そこ、スウェーデンで娘の悠利香、息子の怜は生まれ、現在、悠利香は5年生、怜は3年生になった。悠利香は補習校で6年生、怜は3年生のクラスに通っている。

ハンガリーへ来るにあたり学校はアメリカンと決めていたので、補習校へ通う事は初めから考えていた。しかし、最初「親の運営が成り立っている学校」という事を聞き、正直行かせる価値のあるものかどうか考えさせられた。「行かないよりはマシ」、そんな程度でしか考えていなかった。子供たちが「行きたくない」と言ったらいつでもやめさせようとすら思っていた。

しかし、いつまでたっても子供から「辞めたい」と言って来ない。親から「辞めないの?」と聞くのもおかしな話なのでそのまま行かせることにした。「補習校、どう?」といつ聞いても「楽しい!」という答え。どうやら休み時間に上級生のお兄さんやお姉さんが下の子も一緒に遊んでくれるのが楽しいらしい。これは縦割り教育ではないアメリカンでは経験のできないこと。親としてはそれだけでも行っている価値がある、とも思うのだが、勉強のことが気にならないと言えぼうそになる。

悠利香は3年生の3学期にハンガリーへ来た。その当時、残念ながら3年生のクラスがなく、4年生のクラスに入るしかなかった。3年生までの勉強は一応日本の2学期までに殆ど終ってきたので問題は無い。だが、4年生の国語が全くの独学でするしかなく、補習校の5年生の勉強と並行してやっていた。一時期かなりきついものがあり「補習校、辞めたい」と漏らした事もあったが、最終的には「やっぱりがんばる!」と今までやってきた。なぜここまでして行きたいのだろうか?

悠利香はいつか日本に帰り、日本の学校でついていくためにも行った方がいいに違いない。本人にも多少そういう意識があるのだろう。けど、補習校にきている二重国籍の子たちはなぜ補習校にきているのだろうか?土曜日の朝、やっと平日の勉強や習い事に解放された、と思ったらまた補習校で日本語の勉強。親もまた大変である。普段仕事を持っている方がほとんど。そんな中、バスや電車、中には車で1時間もかけて通っている。去年までなんとスロバキアから通っている子もいた。そこまでしてなぜ通うのだろうか?

私は最初、その子たちにとって補習校はただの日本語教室。習い事の一つくらいのものだらうと思っていた。しかし、彼らの書く作文を読み、授業参観を見るにつれ次第にそれは大きな間違いだってことに気づかされた。彼らはそんな軽い気持ちで補習校にきているわけではない。日本人としてのプライドがあるからこそ来ているのだと。

きっと彼らは普段全くのハンガリー人として生活しているのだらうと思う。それはそれで違和感がないものだとも思う。しかし、いくら生活がハンガリー人と同じであっても、家でハンガリー語しか話してい



なくても半分は日本人の血が通っているわけである。その部分は無視できない。しっかり存在しているわけである。それなのに日本語もしゃべれない、文化も習慣も全く知らない、ということは彼らにある日本人としてのアイデンティティが空白のものとなる。その部分も埋まらない限り100%の自分とは感じないものなのではないか。

これは悠利香たちにも感じたことがある。アメリカンには毎日楽しく通っている。悠利香は特に英語を話す事が好きでリアクションも性格も段々「アメリカン」になってきた。きっと彼女の中ではそれだいいと思っていると思う。けど、何かと「友達来るからお寿司作って」や「ゆかたを着たい」と日本のアピールをしたがる。これはきっと彼女に日本人としてのプライドがあり、どんなに「アメリカン」にあこがれそれがいいと思っててもやはり自分は日本人なのだという誇りは保っておきたいものなのだと思う。

補習校に通う二重国籍の彼らのひたむきさに何度か胸を打たれたことがある。普段見る事も使うこともない漢字を何度も書きうつしては覚え、たどたどしい日本語で一生懸命意見を言おうとしている。きっと大人が思っている以上に大変な努力をしているものだと思う。その苦勞を感じ、うちの子たちも「自分たちもがんばろう!」と思ってくれるだけで大きな価値のあるもののように思う。

そういう彼らを見るにつれ補習校の見方も変わってきた。そこはただ日本語を教えに来てもらう場ではなく日本人であることを改めて認識させてくれる場所であること。そして、そのことが英語がしゃべれる、海外生活の経験があることより何より大事であること。このことはアメリカンに通ううちの子たちですら忘れてしまいがちなこと。オープンな雰囲気。個人主義。意見をはっきり言う。いろいろと日本人として憧れる部分はたくさんあるが、その反面、まとまりがない、自分勝手が多い、意見をはっきり言う事で衝突も多い、と必ずしもいいことばかりではない。「遠慮」という言葉も海外ではマイナスの意味を持つが、私は必ずしも悪い事ではなく、ある意味日本人の美しい部分にすら思っている。いつも自分の意見をぶつけることができる子より相手の気持ちや立場を察し気づかいのできる、日本人らしい「遠慮」のわかる子になって欲しいと思う。

今、補習校は人数もどんどん増え、大きくなろうとしている。これも自分の子が通う親たちでやろうとしていること。しかし、今は自分の子のためだけではなくここハンガリーにいる日本人の子全てのためにがんばって働いてくれている。いつも頭の上からない気持ちでいっぱいである。うちの子たちがここ、緑の丘補習校に通えた経験はハンガリー生活において大きなプラスになると思う。子供たちが「辞めたくない」と言い続けられるような学校にしてきた運営委員会や先生方、そして生徒のみなさんにただただ感謝するばかりである。

(しもむら・あきこ)



ハンガリーで医学への挑戦
ペーチ大学医学部
伏田 昌洋

私が医学の道に進むことを決心したのは高校3年生の頃でした。当時の私は特にこれがやりたいと言った夢もいだいておらず、進路について案を出しては親と衝突しながら話し合っていました。しかし代々続く医者の家系に生まれた長男の道は一つです。親には最後まで医学部に進んで欲しいと打診され、母親の身に起きた痛ましい事故の記憶もあり、自分でも納得した上で大学の医学部に進学することを決心しました。



そこでなぜハンガリーか。それは必然でした。私は父親の仕事の都合上幼少時代からこれまでの人生の半分以上を海外で過ごしてきました。小学校生活をシンガポールの日本人学校で、高校生活はメキシコのインターナショナルスクールで計十年以上を過ごしてきました。そのため身も心も完全に海外の暮らしに順応していましたし、日本の医学部に入るため厳しい受験戦争の中へ身を投じることは到底考えられませんでした。また三つ上の学年に姉が在籍していたこともあり、迷うこと無くハンガリーの医学部進学コースを受験しました。

現在ペーチ大学の一年生ですが、こまめくる間に沢山の困難がありました。高校で化学と物理の両方を選択していなかったため、去年ブダペストで在籍していた医学部進学コースではこれら二つの科目に相当苦しめられました。また新たな土地へ来れば言語もまた違うので、ハンガリー語も覚えなくてははいけません。言語は時間の経過

留学生自己紹介



と共に身につくものと思っている私には新しい言語を学ぶことさえも苦に感じてしまいます。入学試験直前にもやはり理科系二科目に苦しめられました。切羽詰まった私は既に合格が決まっていた同期の友人の家に泊まりこみで勉強を教えてもらい、見まの私は存在しないと思います。大学に入ってから環境がガラッと変わったので、勉強のみならず大学のシステムに慣れるのも一苦勞でした。そんな中先輩方から頂けるアドバイスは、右往左往している我々新入生には何よりも助けになったと思います。相変わらず大学の指導方法や単位の問題などに躓らされていますが、無事進級できるように毎日コツコツと勉強しています。

しかしペーチでの暮らしは辛いことばかりではありません。ペーチは中世ヨーロッパの面影を所々に残した小さな都市といった印象で、学校へ行ったり買い物に出かけたりする際に街を自転車で駆け巡るだけでも息抜きになります。学生都市なので街の人たちも外国人に理解のある人ばかりで、ブダペストで経験した素っ気無い対応とも無縁です。そんな街の雰囲気惹かれてペーチを選びました。年に何度かある毎年恒例の学校行事も楽しみの一つです。それらの行事を通じて学年や国籍の壁を超えているんな人達と交流を深められて友達も増えました。去年は日本人の学生同士で集まる機会もあったので、日本人同士のコミュニティも広めることが出来ました。

勉強に関しては苦しい状況が未だ続いています。週に一度ずつある生物と解剖学のチューターにはだいぶ助けられています。学校で理解が十分でなかったことを質問できたり、テスト前にはテスト範囲の総復習ができて理解度の確認にもなります。

テストが続いて辛い時期もありますが、暮らししていく上でストレスを溜めないためにも独自の息抜きできる方法を持つことは大事だと思います。私におけるそれは、料理と週に一度ある体育のバスケットボールです。時間に余裕のあるときに、少し手間隙かかるものを作って食べるのが何より幸せで

す。家族と暮らしていた頃とは違い家事から体調管理まですべてにおいて自分でしなければいけないのは大変ですが、医者になるための厳しい道を進むためにも試行錯誤は欠かせません。

私はハンガリーでの留学生活で医学だけでなく、家族のありがたみや感謝の心、自己にかかる責任をも学んでいると思いました。親のもとを離れ、干渉されること無く自由に生活できますが、それと同時に今まで当然のように受けてきた親の恩恵に預かること無く自らを律して生活をしなければいけません。そういった点ではまだまだ未熟ですが、これからの大学生活六年を通して医者への道のりを歩みつつ、一人の人間としてレベルアップできたらと思います。

最後に、これまで私が苦しい状況にいた時に助けてくれた友人や先輩方には心から感謝しています。狭い日本人ソサイエティの中で同じ志を持った友人の助けは一人暮らしの大きな支えです。私がそうであったように、私の代に続く後輩たちの支えになれるよう日々努力を続けます。

ペーチ大学の仲間たちとはこれからもお互いに助け合い支え合い、共に夢に向かって精進したいと思います。

(ふしだ・まさひろ)

私の留学生活
リスト音楽院ピアノ科
阿久澤 政行

私は2010年から今年6月までの約2年間をブダペストで過ごしました。ハンガリー留学を志したのは、私が武蔵野音楽大学大学院に在籍していた時でした。ベルケシュ(現武蔵野音楽大学客員教授/ジュール・フィルハーモニー管弦楽団芸術監督)先生との出会いが大きなきっかけとなり、先生と共に2007年夏にリスト音楽院小ホール、エステルハージ城など、国内数ヶ所にて木管アンサンブルのリサイタルを開きました。現在リスト音楽院は修復工事のために建

留学生自己紹介

物内に入ることはできませんが、当時アンサンプルの練習場として毎日通うことができました。練習室からは多くの学生達の音が聞こえ、日本で耳にする学生の音よりもとても感情的で、技術的にも高度だった印象でした。その頃はまだ、自分がリスト音楽院に留学する決意も無かったのですが、刺激になったことは間違いありません。

武蔵野音楽大学、更に大学院で学び次のステップとして国際コンクールへの挑戦とF.リストの作品を学びたいという目標が出来ました。大学院での修士論文のテーマにリストの作品を選び、リスト研究者として学識高い福田弥(武蔵野音楽大学専任講師)先生から多くの知識を学びました。もともと、私はリストという作曲家の作品がとても好きでしたが、論文で追求していくうちにリストの人生観そのものに共感していました。国際コンクールの第一歩として、昨年ブダペストで開催されたリスト国際コンクールへ参加することも、留学を決めた大きな理由でした。

さて、ここからが「留学生生活の思い出」になるかと思いますが、2010年に札幌にてリスト音楽院の入学試験があり、私と同期で入学をした男性がいました。私は大学院を修了する年での受験で、彼は高校を卒業する年での受験でした。互いに意気投合し共に合格が決まり、ハンガリーでの1年目を共同生活することになりました。私の先輩にも当たる知人の協力のもと、部屋を探す事から始まり、いよいよ男2人でのハンガリー生活がスタートしました。初めの一ヶ月はそれぞれ街中を散策したり、海外生活への対応に悪戦苦闘しながらの日々。私より断然に若い同居人はとてもアグレッシブで、すべての事に興味新々。世間的には私もギリギリ若者ではあるが、追いつくのに必死でした(笑)私は同居人に感謝していることがある。

海外での留学は人それぞれ考えが違いますが、私の場合日々の生活においても、練習においても常に存在の意識が出来ることです。演奏の善し悪しはともかく、演奏会とは聴衆がいて成り立つものです。これは演奏

会が特別な訳ではなく、演奏家は常に聴衆の心を魅了するために練習に励んでいるはずです。同居人は共同生活での支え合いだけでなく、時として聴衆の1人として認識することができました。本番での演奏だけが特別ではなく、家での練習そのものが本番と隣り合わせとなり、緊張感を持って練習することができました。練習時間は限られた中での厳しいものでしたが、意味のない長時間よりも濃密な計画性のある3時間程度の練習は、とても有効的でした。時間を操るということは、2時間弱のソロリサイタルで必要不可欠な訳です。集中力と繊細さ、そして爆発的なエネルギーを空間に放出するための様々な練習方法を試しました。ある意味、ピアノに触れていない時間が私の表現、創造に大きく役立ったと思います。また、私の中に迷いが生じ、不安な時、同居人の練習から聞こえてくる音がヒントになることも沢山ありました。信頼関係も深くなり、結局2年目も共同生活をしたのでありました!!

同居人だけでなく、私はこの留学で多くの方々に出会い、とても環境に恵まれた生活を送ることができました。ジャンルを超えて多くの友人ができました。リスト音楽院にて師事していたファルバイ先生、ラントシュ先生はもちろん、オペラ歌手のユタ・ボコールさんとはバルトーク生家にて何回もコンサートをさせて頂きました。

2年目は文化庁海外研修員として留学させてもらいました。その中で指揮者のリゲティ先生と指揮者を目指すために短期留学しにきた日本の男性との出会いがあり、ピアノだけでなく指揮の勉強に参加することが出来ました。そしてクラリネット奏者のコハーン氏との演奏も、自身の音楽の幅を更に広げるとても良い機会となりました。これからも日本とハンガリーの交流を深める意味でも、大切にしたい演奏仲間です。彫刻家ワグナー・ナンドール氏の作品からは強いインスピレーションを感じ取りました。名前を上げたら終わりそうにありません。

私は帰国後に東京、宇都宮、北九州にてソロリサイタルを行う予定です。プログラム

のほとんどがハンガリーの作曲者であり、どの曲も思い入れのある曲で構成しました。私の演奏が聴衆の心に残るよう、1音1音に想いを込めたいと思います。私の留学生生活は、次のステップに進むための大切な時期でした。これからは社会から必要とされる演奏家、指導者として活躍できるよう、切磋琢磨したいと思います。ハンガリーでの1年間は、まさに私自身のラブソディーでした。

(あくざわ・まさゆき)

また必ず戻ってきます
ハンガリー科学アカデミー・音楽学研究所
岡本 佳子

私は現在、東京大学大学院で音楽学を専攻しており、執筆中の博士論文研究のために昨年の9月からハンガリーに留学をしています。大学に通うのではなく、ハンガリー科学アカデミーという国立の学術組織の「音楽学研究所」に受け入れしてもらいました。ブダの王宮の丘にある音楽史博物館と同じ建物、と言ったらピンと来る方も多いのではないのでしょうか。あの博物館は、じつは研究所内の一組織です。私がお世話になっているのはバルトーク・アーカイヴという部署で、窓からはドナウ川の美しい景色を見渡すことができます。

実技ではなく、音楽の研究とはいったい何をするの、とよく聞かれます。私の博士論文は、バルトークのオペラ《青ひげ公の城》についてです。ほかのオペラとはあまりに異なる雰囲気、に圧倒され、さらに魅了されてしまったことが研究することになったきっかけです。いまは、作曲された20世紀初頭のブダペスト文化、とりわけ劇場文化の関係から作品を分析し、解釈しなおし、今まで誰も気づかなかった新しい側面を見出すことを目指しています。

とはいっても、具体的な作業は、ほかの研究者が書いた本を読み(もちろん日本語のほかに英語、ドイツ語、ハンガリー

ミニマラソンに参加して(感想)

語……)、作品の手稿譜を吟味して作曲のプロセスを追い、分析し、当時の関係者の自筆の手紙を読み(見ただけで泣きたくないような字で書いてあるものもあります)、それらをまとめ、整理し、新たな視点を考え、ようやく何か成果(のようなもの)ができたなら研究所のヴィカーリウシュ・ラースロー先生に相談して……の繰り返しなので、くじけそうになることも多く、ややもすればあまり誰とも交流しないような状況になってしまいます。

特定の授業もないなか、そうならずに済んでいるのは、研究所の先生や研究員の方々のやさしいお心遣い、つい出かけたくなるような魅力的な街並み、数知れない劇場や音楽のプログラム、いつも励ましてくれる友人知人、そしてほかの留学生との交流のおかげです。日本人ではとくにモホイ＝ナジ芸術大学でアニメーションを描いている板橋晴子さんや、リスト音楽院の音楽学学科に在籍中の中原佑介さんなど、ハンガリー人と同じ土俵で堂々と活躍している彼らの姿からは本当によい刺激をいただいています。専門はもちろんのこと、ハンガリー語ももっとがんばらなくては!と励みになり、自分の研究のほかに、学会や他大学の授業への参加・聴講を行わせてもらい、語学学校でも勉強し、もちろんコンサートにも通って……と、書いている自分でもびっくりするくらい盛りだくさんの日々を過ごしています。

私にとっての初めての留学も、はや半年。そして奨学金の関係で、この生活も残すところあと1ヶ月ほどになってしまいました。最初は滞在期間が短いことに不満もありましたが、自分ももうすぐ博士課程3年目ですので、決められた時間内に課題を終わらせることも大事だと考えています。無事に博士論文を完成させ、大学院を修了し、今度は別の研究の長期滞在のために再度ハンガリーへ戻ってこれるよう、帰国後、東京でもがんばりたいと思います。

(おかもと・よしこ)

走りきったマラソン 小4 渡邊 野杏

私は、マラソンで初めて3.5kmも走りました。最初は、走りきれないんじゃないかと不安でした。那奈ちゃんと走っていたら急につかれて、「もうやめたい」と思いました。でも、走り方を変えてみると少し楽になりました。だから、あと500mのところで、最後の力を使ってがんばったら、那奈ちゃんとはなれてしまいました。

私は、「このままゴールまで行けそう」と思いました。ゴールへ着いたら、「やっと着いた」と思いました。その後すぐにお母さんと那奈ちゃんが来ました。お菓子をもらいました。そして、「走りきることができて本当によかった」と思いました。でも、那奈ちゃんのペースに合わせていたら、もっと速く走ることができたのかなとも思いました。

今度のマラソンの時は、自分のペースで走ってみたいです。3.5kmも走ることができて、自分の中の最高記録になりました。



楽しかったマラソン大会 小4 升谷 紗綾

私は、走るのは少しだけ嫌なのですが、がんばりました。何分でゴールしたのかも正確にはわかりませんでした。でも20分ぐらいでゴールできました。走る時、優菜ちゃんと走っていましたが、途中ではぐれてしまいました。その時、「待とうかな。」

と、思いましたが、自分のペースで走るのが良いと思ったので走り続けました。走り終わったら、「やった」と思いました。新記録ではないのですが、お母さんに伝えたら、「おお。」

と、言ってくれました。とてもうれしかったです。

次のマラソンやリレーなど、いろいろがんばってみたいです。今回のマラソンは、とても楽しかったです。

スポーツ行事・運動サークル情報

ゴルフ部

○月例会成績 (PANNONIA Golf Course)
3月(3/25) 川口(日本人学校) 榎平(リョーワ) 青島(矢崎総業)
4月(4/15) 秋山(スズキ) 安藤(伊藤忠) 川口(日本人学校)
5月(5/6) 成沢(伊藤忠) 森本(リョーワ) 柿崎(スズキ)
6月(6/10) 金広(ユーラシア) 勝川(リョーワ) 阿部(大気社)
○第16回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権途中経過
(4月中旬～7 月下旬)
準決勝進出: 金広(ユーラシア)、坂梨(丸紅)、柿崎(スズキ)、
成沢(伊藤忠) v s 畑山(ソニー)の勝者
○第6回PANNONIA WORLD CUP (5月6日) 日本、欧州などの選抜
日本選抜チーム A組、B組は夫々ブービー及び
ブービーメーカーと惨敗
○第7回四カ国ゴルフ対抗戦
(チェコ、スロバキア、オーストリー、ハンガリー)
6月24日(日) 於チェコ、ブルーノG.C.
優勝: チェコ選抜チーム 2位: ハンガリー選抜チーム
3位: スロバキア選抜チーム 4位: オーストリー選抜チーム

2012年度 今後の活動、公式行事予定
＜月例会＞ 7月8日(日) 08:00 ～、8月5日(日) 08:00 ～、9月9日
(日) 08:00 ～、10月7日(日) 08:00 ～、11月4日(日) 08:00 ～
＜第17回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権＞8月下旬～10月下旬
＜第3回年代別対抗戦＞30歳から60歳までの各年齢層による対抗戦
(夏～秋頃)
部員募集: ベテラン部員が帰国され、現在、部員数が減少気味で
す。ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフに興味をお持ちの
方は下記連絡先までお問い合わせください。
藤井: akihiro.fujii@eurasia.hu

テニス部

日曜テニスチームは初心者から経験者の15名が参加しワイワイ
と暑中楽しんでプレイをしています。(男性:12名、女性3名) 約30
分の各自ウォーミングup(ストローク&ボレー練習etc)、その後、4
ゲームのダブルスの試合をしています。
場所: マッチポイントテニスコート(マムートショッピングセン
ター近く) <http://www.matchpoint.hu/english/main.html>
時間: 9:00～11:00 (2面)

夏季シーズンスタート!
2012年4月より夏季シーズンがスタートしました。
ご興味のある方はぜひ以下にご連絡下さい。
代表: 的場: h-matoba@exedy.com TEL: +36-30-487-1970

バドミントン部

中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動
をしています。 毎回参加される方が、運動不足の素人おじさんに
加え、女性と子供が数名で合計10名強です。その他、時々参加され
る方が10名強います。 はじめの30分間は練習、その後ダブルス
の試合を行っています。 経験者が少ないので、週末の運動不足
解消という気持ちで続けています。
ラケットは会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持って
きて頂ければいつでも参加可能です。 参加費は、当面1,000HUF/
大人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。 夏になりゴ
ルフなど他のレジャーで参加者が減る傾向があります。 興味のあ
る方は軽い気持ちで結構ですので、是非参加ください。
① 現在の部員数
大人: 約10名(女性も数名)、他に時々参加の方が110名ほど
子供: 8名(試合参加は1名、他は会場を走り回っています。)
② 活動場所と時間帯
日時 毎週日曜日の午後4時から2時間
場所 中学校体育館(ブダベスト2区、Kokeny u. 44.)

③ その他の活動
ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会、 飲み会
④ 代表の名前と連絡先
代表: 升谷裕司
問合せ先: hujpbad@gmail.com

ドナウの四季

「ドナウの四季」のHP
が完成しました。これま
で掲載されたすべての
原稿を読むことができ
ます。 <http://www.danube4seasons.com>
皆様の原稿をお待
ちしています。エッセイ、
ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお
寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のた
めに修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正
をお願いしています。
原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへ
お送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いし
ます。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図
形は別ファイルで送付ください。



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社

体制転換の経済学
黄色の教科書シリーズで知られる専門学
部の定番テキスト。体制転換の理論と転
換直後の現状を分析。各大学で教科書と
して使用。

第一部 社会主義経済の失敗
社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の
比較分析に新たな視点を提供。
第二部 ポスト社会主義経済
体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体
制転換の違いを解明。
■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)

なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】盛田常夫【編訳】

■定価 3045 円 (税込) A 5 判
■ISBN 4-535-78331-4

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を
輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。
日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。
旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法: 事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ: 上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用としていらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>



CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu

Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.

Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネジメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőris utca 25. II/6

Tel&Fax: +36-1-786-7846

Mobil: +36-70-3815548

e-mail: propart@chello.hu

web: <http://propart.client.jp/>

Propart